

T 日程・英語外部試験利用入試 1 限

科 目	ページ
数 学 ①	2～13
数 学 ②	14～39
地 理	40～50
国 語	75～52

〈注意事項〉

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 志望学部・学科によって選択する科目・試験時間が決まっているので注意すること。

志望学部(学科)	受験科目	試験時間
下記以外の学部(学科)	数学①または国語	60分
文学部(日本文)	国 語	90分
文学部(地理)	地 理	60分
情報科学部(コンピュータ科・デジタルメディア)	数学②	90分
デザイン工学部 (建築・都市環境デザイン工・システムデザイン)		
理工学部 (機械工〔機械工学専修〕・電気電子工・応用情報工・ 経営システム工・創生科)		
生命科学部 (生命機能・環境応用化・応用植物科)		

4. 科目の選択は、受験しようとする科目の解答用紙を選択した時点で決定となる。
一度選択した科目の変更は一切認めない。
5. 数学②・国語については、志望学部・学科によって解答する問題番号が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
6. 数学①②については、定規、コンパス、電卓の使用は認めないので注意すること。
7. マークシート解答方法については、問題冊子を裏返して裏表紙の注意事項を読みなさい。ただし、問題冊子を開かないこと。
8. 問題冊子のページを切り離さないこと。

(国)

(語)

●法学部・文学部(哲・英文・史・心理学科)・経済学部・社会学部・経営学部・国際文化学部・人間環境学部・現代福祉学部・キヤリアデザイン学部・G・I・S(グローバル教養学部)・スポーツ健康学部
のいずれかを志望する受験者は、問題(一)(二)(三)(四)(五)すべてに解答せよ。

●文学部日本文学科を志望する受験者は、問題(一)(二)(三)(四)(五)すべてに解答せよ。

(一) つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの1～4の意味で使われる故事成語を、後の選択肢ア～コの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- 1 疑われやすい行動は避けた方がよい。
- 2 どんなことでも自分の人格を磨く助けとなる。
- 3 当事者が争っているときに第三者が利益を横取りする。
- 4 他人の実力や権威を疑って軽視する。

- | | | | | |
|----------|-----------|-----------|--------|------------|
| (ア) 臥薪嘗胆 | イ 鼎の軽重を問う | ウ 画竜点睛を欠く | エ 漁夫の利 | オ 三顧の礼 |
| カ 出藍の誉れ | キ 他山の石 | ク 覆水盆に返らず | ケ 夜郎自大 | コ 李下に冠を正さず |

問二 つぎの慣用句1～4の空欄に当てはまる漢字を、下の選択肢の中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- | | | | | | | |
|---|-------------|------|-----|-----|-----|------|
| 1 | けがの□名 | (ア 巧 | イ 高 | ウ 効 | エ 光 | オ 功) |
| 2 | □にも棒にもかからない | (ア 箸 | イ 橋 | ウ 端 | エ 恥 | オ 嘴) |
| 3 | 浮かぶ□がない | (ア 背 | イ 瀬 | ウ 世 | エ 勢 | オ 生) |
| 4 | 肝に□じる | (ア 明 | イ 名 | ウ 命 | エ 銘 | オ 瞑) |

(二) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本社会は、戦後一貫して物的な豊かさを求め、経済発展が優先されてきた。しかしながら、その裏側で、積み上げられてきた文化が衰弱してきた。科学技術や工業の発展によって、文化の必要性が失われたのである。

料理の世界では、その伝統が引き継がれてきたが、洋食などの外来文化も入り、多様化した。和食文化は相対的に弱まったが、それはそれで食は豊かになった。しかし¹昨今の食の状況を俯瞰^{ふかん}すると、一方で「食べる喜び」が生活のなかでどれだけのものになってしまったのか、疑問を抱く。

顕著になっている「個食」や「孤食」という現象は、どうであろうか。食べるという行為が「腹を満たす行為」だけに特化して、他者とのあいだに挟まれるものではなくなっている。この現象においては、「食べる喜び」が薄れていると言えないだろうか。もちろん、「食べる喜び」があるかどうかは、その人の主観である。単純に金額で測ることもできなければ、明確に定義することもできない。しかし、今日の「食べる」という行為は、効率的な生活をおくるための機械的な行為となり、それまで先人が積み上げてきた苦勞、知恵、工夫、分かち合いなどの文化性や精神性が後退し、^Aケイガイ化、空洞化しているのではないかと思うのである。

「食」を構成する行為は、材料を見極める、材料を仕入れそろえる、仕込む、料理する、盛りつける、材料や料理の知識をつける、新しい味を発見する、などがある。つまり、「食べる」には、その前提として「つくる」、「知る」、「覚える」、「身につける」という生活の術と、その学びがなければならない。さらに、食が分業されると、食を通した支え合いの関係がそこに形成される。そして、「食べる喜び」には、個人において「味わう喜び」のほか、「つくる喜び」、「知る喜び」、「覚える喜び」、「料理を身につける喜び」が、他者との関係において「分かち合いの喜び」がともなっているのだと思う。

だが、いまの日本社会、とくに都市社会においては、そのようなことを考えて生活している人はどれだけののだろうか。こうしたなか、²魚食普及活動が活発化している。行政をはじめ、漁業団体、卸売市場、水産関連団体がおこなっている。生

活者が気軽に参加できるような工夫を施した魚料理のイベントが、各地でたびたび開催されている。魚の基礎知識から、包丁の使い方、またはどうやったらおいしいのか、など料理の手ほどきまで、普及内容はさまざまだ。

魚食普及活動は、深刻な「魚離れ」を防ぐための活動である。その活動の本質は、参加者に「食べる喜び」と、それにとまなう「喜び」を再発見してもらおうということだと思う。

ともあれ、魚を食べたいと思わない人々に強要するわけにはいかない。冷徹に考えると、鮮魚の消費低迷は、生活者の自由選択の結果なのである。なのでむしろ、魚は簡便性食材の原料になればよい、という発想もあろう。

しかし、魚が簡便性食材の原料になって魚の消費は回復するのだろうか。残念ながら、例えばヒット商品はあっても、その需要は長持ちしなかった。食材市場内部で競争原理が働き、新しい簡便性商品が開発され、取って代わる。でも水産物市場全体は先細りしていったのである。この状況を踏まえると、「食べる人」を減らさないようにする、少しでも増やすということが、「魚職」の課題となる。

一方で、「食べる人」にも、魚食がどのように成り立っているのかを知ってほしい。

食は自然からの恵み。とくに魚は天然資源が多い。それを食材としてキョウジユBできるのは、少なからず、苛酷な自然環境のなかで食材を採取する人がいて、それを流通させている人が存在しているからだ。その「魚職」の存在を知ることが、まず第一歩であろう。

また魚に骨があるからと言って、小売店にクレームをつける顧客がいるらしい。「骨なし」と商品に明記されていたならば、クレームがあつてもしかたがない。しかし、切り身商品だから骨がないと思つたら骨が入つていたというのならば、クレームは行き過ぎであろう。種のないブドウ類やミカン類はあるが、イカ・タコ類や貝類など軟体動物は別として、骨のない魚類を見たことがない。骨なしの魚の切り身やフィレB(二枚おろし)はあるが、それは加工現場で骨抜き処理がなされた商品である。

そもそも、魚には骨があるほうが自然である。介護向けの食材を除き、一般向けのものにおいて骨があつておかしいと言う

のは、魚を知らないことによる典型的な例である。また魚は、季節や地域によって脂のり方が異なる。そのため、同じ魚でも、季節や場所によって食べ方が異なる。シユ^Cンの魚はもちろんおいしいが、季節はずれの魚でも食べ方しだいでおいしくなる。また、高級魚でなくても、庶民的な魚をおいしく食べるレシピは、いろいろと考えられている。

自分の希望の魚を、いつも買えるわけではない。しかし、それが自然ではないかと筆者は思う。毎日、同じ魚を食べることなどない。あるときにはアジ、サバ、マイワシ、サンマなどの青物、あるときにはマグロ類やカツオ、あるときにはカレイ類やヒラメ、あるときにはマダイやブリ、カンパチ、時折、アサリやシジミなどの貝類も織り交ぜ、自然の恵みと向き合いながら、日々の変化があるほうが飽きずに楽しめる。魚の種類は地方によって異なるし、日々変化に富んでいるのが魚食の世界である。肉とは違う。そうした変化を織り込んだ消費を繰り返すことによって「魚職」も維持される。

一方、これまでも漁師のあいだでは食べられていたが、商品にならず見向きもされてこなかった魚が一般でも食べられるようになってきている。こうした未利用魚の開発ブームが二〇〇〇年に入ってから話題になったが、決してこの現象は一過性のものではない。³

過去から現在に至る長いスパンで魚の資源動態を追っていくと、資源の増減は自然のことなので、人間がコントロールできるものではない。水揚げされてくる魚から食を考えざるを得ない。いままで獲っていた魚が足りなくなると、新たな魚を獲るほかはない。未利用魚の開発や既知の魚の新たな利用方法の開発は、昔からあり、いまもおこなわれている。実際に、今ではかつてなかった寿司ネタがたくさん利用されている。エンガワと言えば、ヒラメのイメージであり、高級食材のイメージだが、今ではアブラガレイやカラスガレイを原料にした廉価なエンガワが使われるようになってきている。かつて焼き魚食材のイメージだったサンマは、今では生食用としても流通している。こうした流通になってまだ二〇年は過ぎていない。

クロマグロの「トロ」は、今でこそ最高級の商材であるが、かつてはニソク^D三文の部位であった。食の西洋化が進み、脂身が好まれるようになり、かつ一九六〇年代後半にコールドチェーン（超低温の物流網）が発展し、寿司ネタの食材として普及し、流通するようになったのである（トロのような脂身は、もともと日本人の口に合わなかった）。いずれにしても、既存の魚の「不足」やそれへの「飽き」と、新たな魚の「発見」、食べ方の「発見」による既存の魚の「再発見」が魚食の世界にはある。⁴

（濱田武士『魚と日本人 食と職の経済学』より。文章を一部改変した）

問一 波線部 A～D のカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

問二 傍線部 1「昨今の食の状況」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 和食文化が引き継がれると同時に、日本では洋食文化が普及することによって、人々が多様なメニューから自由に食事を选べる豊かさを手に入れた、という状況。

イ 効率が優先される都市生活のなかで、人々は未知の食材に出会ったり新しい味覚を発見したりする機会に恵まれ、食べる喜びが充分に実現されている、という状況。

ウ 経済発展が優先された日本社会では多くの文化が失われてきたが、和食文化もまた衰弱させられ、食の伝統を引き継ぐ後継者がまったく見つからない、という状況。

エ 日本では「個食」や「孤食」といった文化が一般化することによって、だれもが喜びを感じられない、腹を満たすだけの孤独な食生活を強いられている、という状況。

オ 人が食事について知ったり料理を作ったりする喜び、またそれらの行為や食事を他人と共有する喜びが失われ、蓄積されてきた食文化が衰弱している、という状況。

問三 傍線部2「魚食普及活動が活発化している」とあるが、どうしてか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 魚離れが進むなか、魚を簡便な食材の原料とし、手軽な加工食品によって消費を回復させ、市場全体を活性化しているため。

イ 魚離れが進むなか、魚選びから料理にいたる、味わうだけには収まらない喜びを体験してもらい、魚食を選ぶ人を増やすため。

ウ 魚離れが進むなか、手間のかかる魚食の普及を通じて、他人と分かち合うことでしか味わえない食の伝統を復興するため。

エ 魚離れが進むなか、魚の食材市場でも競争原理が働くようになり、多くの小売店が宣伝を兼ねてイベントを行なうようになったため。

オ 魚離れが進むなか、魚を食べない人にも正しい知識や料理の仕方を広く伝え、魚食を貴重な伝統文化として保護していくため。

問四 傍線部3「決してこの現象は一過性のもではない」とあるが、その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 経済発展を目指してきた戦後の日本社会では、一貫して高級魚の新たな利用方法が開発されてきたということ。

イ 自然の恵みである魚食は、季節や地域が変われば食べる魚の種類や調理の仕方も変えなくてはならないということ。

ウ 長い期間では、魚の資源には自然に増減が起きるので、獲れる魚や新しい魚の利用は昔から行なわれてきたということ。

エ 流通の進歩や食生活の変化によってもたらされた未利用魚の開発ブームは、今後も継続すると考えられるということ。

オ 魚の加工食品の消費拡大は、既知の魚の新たな利用方法が開発されてきたことによってもたらされたということ。

問五 傍線部4「魚食の世界」とあるが、それについて書かれたつぎの各文の中から筆者の考えに合致するものを二つ、選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 魚についてよく知れば、加工された魚だけではなく、季節はずれの魚や高級ではない魚もおいしく食べられる。
- イ 効率的な生活を追求するなかで、加工食品や骨のない魚など新しい食べ方が広がり、魚食は豊かになっている。
- ウ 新しい高級魚の出現や食べ方の発見は、流通の進歩に象徴される科学技術や工業の発展によって可能になった。
- エ 魚が消費者に選ばれるためには、季節や地域にあまり影響されず希望する魚を買えるようにすることが必要だ。
- オ 資源の増減で魚の種類や食べ方が変わる魚食では、自然の恵みに向き合い、日々の変化を楽しむことができる。

問六 本文中で使われている「魚職」という言葉は、筆者の造語である。その言葉には筆者のどのような意図が込められているか。本文全体の内容を踏まえて、「食」と「職」の関係に注目し、つぎの形式にしたがつて、三十五字以上、四十五字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

□
という意図。

つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

かつてに言葉だけが一人歩きをして、広く世間に流布することは珍しくない。「人種」という言葉も、そんな例だろう。人類学という学問領域、あるいは「人種学」という学問分野(もどき?)の枠組みから外れ、業界語であることをやめて、いまや括弧なしの一つの日常語となった。そして、なんらかの不特定な属性をもつ人間グループを指し示す日常語として広く使われるようになった。

そもそのなりゆき、日常語となっても、多少とも独断と偏見の匂いがただようことが多い。最悪なのはナチス・ドイツで始まった例。「ユダヤ人種」とか「アーリア人種」の例。まさにトンデモ語が捏造され、悪質なプロパガンダのために使われた。いまでも見かける危険な用例。

それとは逆に、軽いので使われることも少なくない。たとえば「政治家という人種」「テレビタレントという人種」などの言い方。あまたあるが、これらにも揶揄的な意味がこめられていることが多い。その他、メディアなどで頻発する「人種」暴動とか「人種」戦争とかの例は、ことさらにどぎつい表現例と言えよう。ともかく日常語となっても、「人種」には「あく」の強さがつきまとう。

日本語の「人種」とは、たとえばドイツ語の RASSE か、英語の RACE を輸入し、意識したものでしょうか。日本語の「人種」は意固地な響きがあるが、英語の RACE のほうがゆるやかな語感である。「日本人種」などと耳にすれば、きわどい感じできつとするが、「The Japanese Race」は「日本民族」と翻訳され、大きな違和感をおぼえない。それは、自分だけのことだろうか。

この RACE、そもそものはアッシリア語 RAES から転訛、語源的には、物事の筋道、あるいは生物の系統、家畜の品種などを意味する言葉だったようだ。

それに対して、そもそも日本語の民族という言葉が由来するのは英語の民族(ethnic group)で、その語源にあたるギリシ

ヤ語のエトノス(ethnos)は、本来の意味が「群れ」であり、有象無象の「ちやこちやした動物の集合のことであり、蟻の「群れ」とか、蠅の「群れ」とかのごとく使われていたようだ。それが道を外れて、人間の集団を表す言葉として使われるようになったのらしい。

このように「人種」と民族とは、出発点においては、まったく別の言葉であったが、いつのまにか、人間の集団ないしは集合を表現する概念となったのである。そして二〇世紀の前半までの「人種学」全盛の頃には、ほとんど同じ意味合いで用いられ、両者の区別に特別な配慮がなされていたように思えない。² どちらも西欧流の植民地主義の世界観のまま、世界中の人々を分割し、切りばりする概念として、なまかならぬ役割を果たしてきた。

ところが最近でもなお、多くの人類学の成書には、^{*}民族は文化的特徴による人間グループの区分に適用すべし、人種は身体特徴による区分に使うべし、ともかく、民族と「人種」は厳密に区別すべし、などと記述される。たしかに言葉で表すのは容易頭のなかで考えるのも容易だが、³ 実際には、⁴ すっきりと両者を区別できるわけではない。

ある言語とか、なにがしかの文化的特徴の広がりとかで、ひとまとまりの人々を一つの民族として定義するのは案外、たやすかろうが、ひとそろいの身体特徴を備えた人々の境界をひくのは至難である。とりわけ移動好き社交好きの人間という動物の場合、たやすく集まり、すぐに離れたりするから、一定のかたちをもつ集団を区分するのは容易でない。そんなこともあり、現在の人類学で集団を区分するのに、より重視すべき基準となるのは、はたから眺めて判別する身体特徴の違いでも文化的特徴の違いでもない。むしろ人々の内なる⁴ 集団意識、帰属意識、仲間意識なのである。どこに属するのか、どの集団の仲間として自分を意識しているのか、それが問題なのである。

つまるところ、そもそも「人種」区分や「人種」分類とは、皮膚の色とか髪の毛の性状とか、あるいは体形とか体格とか、たんなる身体の見かけの違いによって人間を区別するトリックのようなものである。かつての西欧列強国による自国民中心思考の身勝手な意図が見え隠れする。民族区分と違い、「人種」区分のほうは、本人の意思ではどうにもならない身体の違い、わかりやすそうな違いに着目するところが、なんとも悩ましい。

もちろん、皮膚色、毛髪の性状、体形や体格、身長、頭形や顔形などとは、おたがいに相関するわけではない。しかも各集団は、多くの形質について、連続的に変異する。そして、どの集団でも個人差が無視できないのだから、平均値で比較するほかない。たとえ、比較する集団数、形質数、個人数などを多くして、客観性を強調しようと目論んでも、そうするほど逆に、グループ間の関係性は見えにくくなり、「人種」区分のあぶなっかさが露呈してこよう。蜘蛛の糸にからまるようなものだ。

さきにも述べたが、「民族と「人種」、どちらのほうが集団意識のようなものを実感しやすいか、ということでは、まちはがいなく民族のほうに軍配が上がる。ある民族グループ内での言語なら言語についての共通意識の強さは、「人種」グループ内での身体形質についてのそれの比ではない。

民族を同じくする場合、たいていは同じ言語を用いる。言語ほどに仲間うちの親和効果をうながすものはない。マイノリティの民族が言語の維持復興にこだわるゆえんである。くわえて、同じ民族の人々は共通の風俗習慣を大切に、同じような行動をとり、同じような思考をしやすい。だから集団への強い帰属意識が自然発生的に生まれる。「アヒルのように歩き、アヒルのように鳴き、アヒルのような格好をするなら、それはアヒルに違いない」——そんなことを実感し続けるのが民族というのだ。しかるに、同じような鼻形、頭形、体形、皮膚色、体毛であろうと、同じ血液型や遺伝子型を持つていようと、仲間意識が生まれやすいとは限らない。

しかしながら現実には、民族の帰属意識なるものも言語などの純粹に文化的特徴だけに根ざすのではなく、ときに、なんらかの身体特徴が関わることもある。身体特徴は狭義には、顔立ちや体形、皮膚色の濃度、毛髪の性状など、形態的特徴、生理的特徴、遺伝子変異など、ある程度の遺伝性が認められる身体的性質(形質)だけを指す。だが、なんらかの身体加工や身体変形もまた、立派な身体特徴には違いない。あるいは、各種のアクセサリや衣装などの身体装飾、さらには身ぶりや仕草や踊りなどの身体表現も身体特徴と言えなくはない。

これらは、いうならば、「文化的」身体形質なのであり、「擬似的」あるいは「表現的」身体形質なのだ。これら広義の身体特徴

のほうが、一人ひとりの帰属意識を維持し続けるために、あるいは向上させるために、より重要な仕組みとなる社会や民族は少なくない。帰属意識などというものは、たえまなく更新し続け、高揚させ、普及させなければ意味がない。そのためには、本人の意思ではどうにもならない遺伝的形質ではなく、「文化的」身体形質のほうが、大きな効果を発揮するわけだ。

生物学的身体形質が第一次的身体特徴ならば、さまざまに施された抜歯とか鯨面文身(けいめんぶんし)(入れ墨の類)とかの身体加工や、頭蓋(とうがい)変形とか各種の身体変形などの文化的意匠は、いうならば第二次的身体特徴。また、衣装などによるものは装飾的身体形質であり、身ぶりや仕草などは表現的身体形質とも言えよう。これらは第三次的身体特徴と呼んでもよからうか。

もちろん「人種」では、まさに第一次的身体特徴だけが問題となる。しかるに民族については、第二次あるいは第三次の身体特徴だけが問題となるわけではない。外見で認識される第一次的身体特徴も、当然のこと、少しは問題となる。要するに民族もまた、「人種」と同様、実際には身体の問題にも関わるのだ。この点では、さほど両者に変わりはない。「人種」と民族の区別は、どこまで第一次的身体特徴にこだわるのか、その程度の違いでしかないとも言える。

(片山一道『身体が語る人間の歴史 人類学の冒険』より。文章を一部改変した)

【注】 *エトノス ギリシャ語で「民族」を意味する語。

*成書 書物。

問一 傍線部1「ともかく日常語となっても、「人種」には「あく」の強さがつきまとう」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 「人種」は、婉曲的な表現の中で使われたとしても、反社会的な意味合いがにじみ出てくる言葉であるということ。
- イ 「人種」は、何気なく用いられたとしても、少なからず根拠のない先入観が見え隠れする言葉であるということ。
- ウ 「人種」は、メディアに誤解されることが多いほど、その実体が不明瞭ではっきりしない言葉であるということ。
- エ 「人種」は、普段の生活で軽い意味合いで使ってはいけない、差別意識を象徴するような言葉であるということ。
- オ 「人種」は、日常語における曖昧な使われ方が示すとおり、不明確な区分を示すにすぎない言葉であるということ。

問二 傍線部2「どちらも西欧流の植民地主義の世界観のまま、世界中の人々を分割し、切りばりする概念として、なまなかならぬ役割を果たしてきた」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 「人種」や民族は、西欧の文化圏のみに根付いた中途半端な概念であるが、それ以外の国々でも各国独自の日常語として用いられるようになってしまったということ。
- イ 「人種」や民族は、西欧の強国が様々な文化や宗教をもつ国を支配するために考えられた概念であり、それらの国々との衝突を生むような不安定要素として常に存在してきたということ。
- ウ 「人種」や民族は、西欧の学者たちが学界のみで通用する概念として生み出したものだが、広く世界に浸透してしまっただため、無用な世界の分断を生んできたということ。
- エ 「人種」や民族は、西欧諸国の独善的な考えに基づく概念であり、その国々が植民地支配を進める原動力であった一方で、異なる文化圏を結びつける役割を担ってきたということ。
- オ 「人種」や民族は、西列強国の価値観が反映された概念であり、ときにはそれらの国が世界を把握するための都合のよい物差しとして用いられてきたということ。

問三 傍線部3「実際には、すつきりと両者を区別できるわけではない」のはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 「人種」は身体形質を基にした区分だと一般的に認識されることが多いが、民族もまた文化的な身体形質を基にして人間を区分することがあるから。

イ 「人種」は遺伝的身体特徴の区分として使われるのに対し、民族はその「人種」区分に従いつつ文化的身体特徴を基としてさらに細分化した区分にすぎないから。

ウ 「人種」は身体的特徴によって区分されると考えられているが、その観点から人間を分類することは難しく、結局、使用言語による民族の区分が援用されているから。

エ 「人種」は身体形質の平均値のみにより、人間を区分しようとする学術用語であるが、言葉や風俗を基に人間を区分する民族と同様に、客観性を欠いた分類だから。

オ 「人種」は先天的な身体特徴を重視した区分であり、民族は後天的な身体特徴を基にした区分であるが、この二つの区分は世界的に重なることが多いから。

問四 傍線部4「人々の内なる集団意識、帰属意識、仲間意識」とあるが、これらの意識をより高めるものとして適切なものを二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 人類学による区分 イ 毛髪の性状 ウ 血液型 エ 言語 オ 身体加工

問五 空欄

X

に入る表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 秘密結社

イ 抑圧装置

ウ 運命共同体

エ 理想郷

オ 血縁関係

問六 傍線部5」ときに、なんらかの身体特徴が関わることがある」のはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア どの社会や民族にもそれらの特徴づける身体変形や衣装というものが存在するが、先天的特徴や言語は必ずしも国家単位で存在するものではないから。

イ 遺伝的性質に比べると、身体変形や装飾品は擬似的な身体的特徴にすぎないが、時には民族間の対立を乗り越えるために利用されることがあるから。

ウ 身体加工や文化的な装飾は社会の帰属意識を維持するために日々発達するものであり、生まれ持った身体の性質まで更新し続けることも可能だから。

エ 身体加工や装飾品などは、集団の一員として認められるために施されることもあり、その集団の嗜好や文化的特質を色濃く反映しているから。

オ 身体的加工や衣装、さらに日常的なしぐさは民族・社会の帰属意識の表れであり、顔立ち・皮膚の色など遺伝的な身体的特徴と密接な関係にあるから。

問七

二重傍線部「人種」という言葉」を筆者はどのようなものと考えているか。本文全体の内容を踏まえ、三十五字以上、四十五字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

(白 紙)

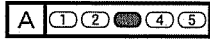
マークシート解答方法についての注意(共通事項)

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどを使用しないこと)。

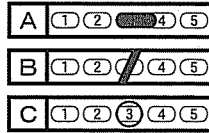
記入上の注意

1. 記入例 解答を3にマークする場合。

(1) 正しいマークの例



(2) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

2. 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
3. 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
4. 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔数学②〕(情報科学部・デザイン工学部・理工学部・生命科学部)

マークシート解答上の注意

〔数学②(情報科学部・デザイン工学部・理工学部・生命科学部)〕は〔数学①(それ以外の学部)〕と異なる科目です。

問題中の ア, イ, ウ … のそれぞれには、特に指示がないかぎり、- (マイナスの符号), または0~9までの数が1つずつ入る。当てはまるものを選び、マークシートの解答用紙の対応する欄にマークして解答しなさい。

ただし、分数の形で解答が求められているときには、符号は分子に付け、分母・分子をできる限り約分して解答しなさい。

また、根号を含む形で解答が求められているときには、根号の中に現れる自然数が最小となる形で解答しなさい。

〔例〕 $\frac{\text{ア} \sqrt{\text{イ}}}{\text{ウエ}}$ に $\frac{-\sqrt{3}}{14}$ と答えたいときには、以下のようにマークしなさい。

ア	<input checked="" type="radio"/>	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イ	<input type="radio"/>	0	1	2	<input checked="" type="radio"/>	4	5	6	7	8	9
ウ	<input type="radio"/>	0	<input checked="" type="radio"/>	2	3	4	5	6	7	8	9
エ	<input type="radio"/>	0	1	2	3	<input checked="" type="radio"/>	5	6	7	8	9

※ 「数学①」の選択肢には- (マイナスの符号) はありません。